

世界には差別で苦しんでいる人がいる。その差別の奥には、ある特定の人に向けられた偏見というものがあるのではないだろうか。

例えば障がい者の方は、「障がいを持っているからできないことがある。」という偏見を持たれている場合がある。障がいのある方が働ける場もまだまだ少ない。そのため、自ら障がい者であるということを打ち明けにくい環境に置かれている。しかし、どんな障がいを持っていても、その人にできることは必ずあるはずだ。

だが、長年脳に張り付いた偏見を取り除くことは簡単ではない。だから、まずはこれから社会の中心となっていく若者から偏見を無くしていくのが良いのではないだろうか。具体的には、小学生の頃から障がい者理解学習の授業を充実させていく。その一環として、実際に障がいのある方と触れ合う機会をもっと設けるべきだと考える。障がい者施設に行き、その中で一緒に食事をしたり遊んだりするなど、まずはお互いの中身に触れることから始めてみてはどうだろう。きっと、それまで知らなかった新たな一面が見えてくるはずだ。

ただ、差別は偏見から生まれるものだけではない。今もなお問題になっている「人種差別」はその一つだ。歴史に目を向けてみると、一部の権力者が、自分と違うものを持った人を支配したり奴隷にしたりする時代があった。そのような社会的背景により、例えば黒人の方の中には、何百年経った今でも差別に苦しんでいる人がいる。この差別の感覚が当たり前ようになってしまっている地域においては、特定の人を差別しているという認識すらないかもしれない。

では、人の内面は何で決まるのだろうか。社会的背景や人種の違いによって、周囲から決められるものなのだろうか。そんなはずはない。以前私が通っていた英会話スクールにいらっしゃった黒人の先生はとても良い先生で、接しやすい人柄であった。つまり、その人の内面は、その人と接してみて初めてわかるものなのだ。だから私たちは、もっと国際交流も増やすべきだと思う。自分と見た目も文化も違う海外の同級生を招いたり、逆に私たちが海外の学校を訪ねたりする。そこで、お互いに自分の国の文化や伝統について交流する。そうすることで、どれだけ見た目や文化が違って私たちが同じ人間であり、同じ心を持っているということを理解しあえるのである。

みなさんにも、実際に深く関わってみて第一印象と全く違う印象を持つようになったという経験はないだろうか。その人と何も関わっていないのに、「障がいがあるから」「肌の色が違うから」といって差別をする人は、今でも少なくない。だからこそ、さまざまな交流の機会を増やすべきなのだ。私たちは相手の中身を知ることによって、それまで持っていた偏見を無くすることができるのである。

私たちの未来は、差別のない誰もが暮らしやすい社会にしていきたい。なぜなら、「差別」がなくなるだけで幸せになる人はたくさんいるのだから。差別によって苦しんでいる人には、一日でも多く笑顔になってもらいたい。私たちは、差別に対する意識をもっと高めなければならないのである。今もどこかで苦しんでいる誰かのために。